



# さわやか通信



## 「化学療法レジメン審査委員会について」

腫瘍センターではレジメン審査委員会を設置し、がんの化学療法のレジメンの審査を行っています。この委員会の目的は、「科学的に有効性と安全性が検証された治療法」を「安全に行う」ため各レジメンを審査する事です。この委員会は、がん化療に関わる各科の医師、放射線科医、薬剤師により構成されています。これまでは各科が独自に行っていた化学療法について、エビデンスレベルと安全性を評価し、基本的には審査を経て登録されたもののみが本院で実施可能になります。具体的には、医師は各種がんに対するレジメンの申請を行い、審査委員会で承認されると、それが登録され、レジメンのセットが組まれ注射オーダーできるようになります。

「標準療法」とは、少なくとも生存期間を延ばす事が立証されたもので最もエビデンスレベルが高いものです。外来化学療法センターでは、基本的には標準療法が行われます。しかし初回治療では標準療法が確立している事も多いのですが、再発や治療不応の場合には標準療法は存在しません。また緩和的な意味で行われる治療も

必要です。

これまでは、こうした場合には十分な根拠なく個人的な経験で行われる事も少なくありませんでした。今後はエビデンスレベルが低くレジメン審査委員会で承認されていないレジメンを実施する場合は、キャンサーボードで報告していただき、十分討論し透明性を高くして実施する事が必要と考えています。

さらに全てのレジメンを登録する事により薬剤部でのレジメン管理が可能となり、より安全性を高める事が出来ます。登録したレジメンをレジメン・セットとしてオーダーできる様になると、薬剤や投与量のチェックが容易となり、人的ミスの減少が可能となります。

現在かなりのレジメン数の審査を行いました。まだ審査途中です。全レジメン登録を目指して残りのレジメン申請をよろしくお願ひいたします。

(腫瘍センター長 大西一功)

## 「グライダーで飛んでみませんか？」

私は、10年ほど前から浜北の天竜川の河川敷でグライダーの操縦を楽しんでいます。グライダーは、ハンググライダーやパラグライダーとは違う乗り物で正式には滑空機といい飛行機の仲間でエンジンがないのと長い主翼が特徴です。

私たち遠州グライダークラブが運用しているのは、全長8m、重さ350kg、主翼の幅16m、二人乗りで教官と同乗し操縦練習が出来るドイツ製の機体です。エンジンがないので、グライダーに約1000mのワイヤーロープを取り付け、これを自動車のエンジンを改造したウインチで巻き取り離陸します(写真1)。高度約300mでワイヤーを切り離した後は時速80kmで飛行し1秒間に1mほど下降して約5分で着陸します。上昇気流を見つければ出来れば高度500m以上に上昇したり1時間以上飛行することもできます。

アマチュアとはいえ飛行機の運用で最も大切なのは安全の確保です。いろいろな天気予報をみて天気の移り変わりを予想する、チェックリストを用いて機体の準備をする(写真2)、操縦練習する人が同乗教官と飛行前に緊急操作の確認をする、無線通信で聞き違いをなくすよ



うに話す、自分自身の体調を把握する、等は医療事故を防ぐ方策と基本的に同じでいろいろ考えさせられます。先日、チェックリストをはしょりそうになり、「鈴木さん、おうちやくはいけませんよ。」と言われてしまいました。

風の音だけの静かな飛行はジェット旅客機とは違う新鮮な体験です。自家用車の運

転と比べると飛行機の操縦は難しいですが挑戦しがいがあります。機体の整備だけでなく河川敷の草刈りやごみ拾もする社会人クラブですが、興味のある方がおられましたら遠慮なくご連絡ください。

(麻酔科蘇生科 鈴木 明)



## ～旅に想う～

「中東」と聞くとどんなイメージがありますか？

「イスラム過激派→テロ」というイメージでしょうか。それとも、オイルマネーで造られた奇抜な建造物？最近では世界遺産流行りなので、各地に残る遺跡の数々をご存じの方も多いかもかもしれません。…いずれにしても、日本を遠く離れた、そこはまさしく『異国』。

私は毎年「中東」を旅しています。せっかくだから珍しい国に行ってみようと思いついたことから始まったのですが、今では彼の地の奥深さにすっかり魅了されてしまいました。

その魅力は人類の長い歴史を肌で感じられることです。文明の黎明期に始まり、主要な宗教が生まれて発展し、世界最高峰の哲学・科学・文学・芸術などの文化が花開いた地域ですから、その遺産の洗練された美しさとスケールの大きさには圧倒されます。それが過去の栄華の跡であれ、現在も人々が生きる都市であれ、何千年にも及ぶ長い時間と広大な空間とが織り成す世界に足を踏み入れることは、日本では味わえない「悠久」という感

覚を与えてくれるのです。

例えば、葦の茂るユーフラテス河の岸辺で日の出を待つとき。朝靄の中から雄姿を現すバールベックの列柱を見上げるとき。ペルセポリスで真昼の太陽の眩しさに蜃気楼を見るとき。シバームの土煉瓦の摩天楼が夕闇に沈みゆくのを眺めるとき。パルミラの満天の星々の煌めきに古の隊商を想うとき。或いは、ダマスカスの喧騒のスークで、エルサレムの嘆きの壁で祈る人々の間で、イスファハンの静謐なモスクの中で、この感覚は常に私の中に生まれてきます。

そんなとき、現在と古代の時間軸と空間軸が交叉して、自分の今いる場所や存在が限りなく不確かなものに思えてくるのに、その反面、自分がこの時代に確かに存在しているという奇跡を強く感じるのです。

そんな不思議の国、中東。まだまだ語り尽くせない魅力がいっぱいです。あ、そうそう、中東はごはんだっておいしいんですよ（これ最重要！）。

（眼科 望月美奈）

## 《趣味は時計！》

私の最近の趣味は時計です。時計といってもクォーツと呼ばれる電池式ではなく **自動巻**と呼ばれるもので、バネのちからと歯車で様々な動きをするものに心惹かれています。自動巻というと雑誌に載っている様な数千万円から安いもので数十万円のイメージがありますが、そんなものはとても買うことができません。しかし実は1万円前後でも結構面白いものが手に入ったりします。もちろん造りや機能はそれなりですが・・・一代目は10年ほど前に8000円でオークションにて競り落とした時計が **山本寛斎の自動巻でパワーリザーブ**と呼ばれるバネの巻具合をみる機能付いたものでした。二代目は **Gallucci**というイタリアのブランドで表からちょこちょこ動くテンプを見ることができ、デザイン的にも面白いものだったため、学生には「先生いい時計ですね。100万円ぐらいするんですか」（実際は1万円でした）なんて言われました。現在はSEIKOの海外モデルでミリタリータイプの **SEIKO5**という時計を使っています。



SEIKOは現在国内では一部をのぞいてクォーツしか作っていませんが、海外では自動巻を作っていて、海外でも意外と人気ようです。表はふつうの時計ですがやはり自動巻で、疲れたときにたまにはずして裏側から機械をみて一人でにやにやしています。 **時計なんて時間が分かればいいたい方も多いたと思いますが大まには見方をかえて、皆さんも一本ぐらいは如何ですか？**

（女性用もかわいいのありますよ。）

（泌尿器科 永田仁夫）

## 「その一言で」

ご縁をいただき浜松医科大学に着任してから早くも半年が経過しました。この間、病院長先生をはじめ教職員の皆様のご支援により今日を迎えていることにつきまして、この場をお借りして感謝申し上げます。

浜松に来て、通勤途上に病院正面玄関から富士山のご機嫌を伺うのが日課となりましたが、この半年間ではほとんど見ることはできませんでした。地元の方々によれば、これから迎える冬は期待できるとのこと、その瞬間が楽しみです。

さて、出会いは別れの始まりの言葉どおり、今年の春以降、これまで私が長い間お世話になった方々が複数名他界されました。その中の一人は私が少年時代から様々なご指導をいただいた方で、 **「尽くされるより尽くすよこび」**を生涯に亘って実践された方です。ご指導いただいたことの中で、病院に勤める者として強く心に残っている言葉があります。 **「その一言で励まされ、その一言で夢を持ち、その一言で腹が立ち、その一言でがっかりし、その一言で泣かされる。ほんのわずかな一言が、不思議に大きな力を持つ。ほんにちよっとの一言で。」**

かつて病院外来のカウンターに立っていた頃、とある患者さんに伝えた一言が患者さんの心を深く傷付けてしまい、後で強烈なお叱りをいただいたことがあります。本院のご意見箱にも、病院スタッフの一言に対する苦情、不満が時々寄せられます。

**「言う者は水に描き、聞く者は石に刻む」**

言葉を発する者は一瞬で終わりますが、言葉を受けた者は深く心に刻むことがあります。ともすれば、コミュニケーション不足が問題となる現代社会、「その一言」の重みを充分認識しながら日々精進したいと考えています。

（医事課長 仲井精一）

